
六人の旦那様

aaa_rabit

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

六人の旦那様

【Nコード】

N0389M

【作者名】

aaarabbit

【あらすじ】

ある日、空軍中佐として穏やかに暮らしていたルーティシアの元に六人の自称旦那様がやってきた。彼等の子供を産むこと。それが皇帝より遣わされた任務！？

不定期更新。時系列バラバラに書いていきます。

ネタバレという名の登場人物紹介

なんかもう、登場人物が多すぎて把握しづらいので、登場してない人物まで書いておきます。今後出演予定ではありますが、何時になるやら。適度にご覧ください。

・主人公

ルーティシア・バレッタ・レンツァー・ミラコン・スオード・ライデン・ドルス

初期段階で17歳

ディエル帝国空軍第二部隊隊長、中佐

長子相続という帝国の法律により、6つもの爵位を約束されている可哀相な女の子

”雪華の魔女”の二つ名を持つほど強い（二つ名の由来は本編にて）

服装によって男女問わずハーレムを作れる特殊体質

・旦那×6

カイザーク・ディエトラン

初期段階で19歳

ディエル帝国皇太子

ルーティシアとは幼なじみの間柄

幼少時より淡い恋心を持っている

長子レオン・ディエトランのパパ

最終的には皇后位をルーティシアに置き、普段は第二妃と暮らしている（たまに帰ってくる）

想いが報われない可哀相な人その1

シエラン・バーネンルグ

初期段階で21歳

上級魔術師

バレッタ伯爵家遠縁

丁寧語の優男

極度の方向音痴で傾国の放浪師と呼ばれている

傾国の名を与えられるほどの女顔負けの美形

次男（名前はまだ考えてません）のパパ

トリス・ガレット

初期段階で28歳

空軍中将でルーティシアの直属上司にあたる

レンツァー侯爵家縁

寡黙な人で目で会話している

三男（名前はまだ考えてません）のパパ

唯一離婚した人

レーデルカ・ストレニア

初期段階で16歳

ストレニア子爵家の次男

ライデン公爵家遠縁

画家を目指す学生

極めて温厚、いつもほのぼのしている

四男（名前はまだ考えてません）のパパ

クリストファー・デリン

初期段階で25歳

デリン伯爵家の四男、五人いる副宰相の一人でカイザークの右腕

ミラコン侯爵家縁、又従兄弟にあたる

生粋の口説き魔

伊達男

五男ルーカス・ミラコンのパパ

シェイス・スクオーツ

初期段階で22歳

陸軍少将

スオード公爵家縁

ドーランの英雄、血濡れの獵犬など軍内でも有名な人物、最強の剣士の噂も

ルーティシアー途な変態

よく殴り飛ばされるがそれすらも愛に変換される

六男シリス・スオード、長女（名前はまだ考えてません）のパパ
最終的には一緒に生活している

ネタバレという名の登場人物紹介（後書き）

三人のお子様sとお祖父様、お祖母様、両親の名前を募集します。
これだと思われる方、どうか教えてください。
待ってます。

外伝1 僕の家族（前書き）

と、飛んだ???内容に変わりはないです。ご迷惑おかけします。

外伝1〜僕の家族〜

「僕の家族 初等部2年A組シリス・スオード。」

僕には母さんと6人の父さん、5人の兄さんがいます。普通なら遺産相続や嫉妬などどろろの愛憎劇があるのですが、家は父さん達の仲も良いし、兄弟もそれぞれ仲良くやっているので問題ありません。

ところでなんで父さんが6人もいるかというと、大人の事情という奴で母さんが5つも爵位を持っているからです。

どちらが皇帝か判らなくなるからと前皇帝が分家からそれぞれ母さんと結婚するよう命じたそうです。その結果産まれたのが僕達6人の兄弟です。

僕達は家の事情でそれぞれ別れて住んでいます。でも、父さんだけは母さんと住んでいます。母さんは雪華の魔女と呼ばれる軍人で、僕の憧れです。

なのに父さんはへたれです。どうしてあんなに格好いい母さんが父さんとラブラブなのかよく判りません。僕なら絶対他の父さんが良いです。

話が逸れました。僕達兄弟と父さん達は週に一回、全員で食事を摂ります。中には奥さんを連れてくる父さんもありますが、不思議なことにみんな仲が良いです。でも最近寂しいことがあります。一番上の兄さんが隣国に留学してしまったことです。見聞を広めるために必要だと兄さんの父さんが言っていました。寂しいことにはありません。二番目の兄さんは魔術学校に通い出しましたし三番目の兄さんは旅に、4番目と5番目の兄さんは全寮制の上級学校に行ってしまったので集まる人数が段々減ってきているんです。

家庭崩壊の危機です。僕は母さんに訴えましたが、父さんが母さんにちょっかいをかけて僕の邪魔をするので満足に話が出来ません。父さんなんて大嫌いです。あんなのが陸軍総司令では世も末です。近いうちにこの帝国は滅びてしまうでしょう。あ、でも一番上の兄さんと父さんがいるので大丈夫でしょうが。僕としては母さんは早く父さんと離婚して、別の父さんと暮らして欲しいです。5番目の兄さんの父さんは女たらしなので嫌ですけど。

もうすぐ僕の妹が産まれます。今度の父さんは僕の父さんだそうです。

どうせだったら一番目が二番目の兄さんの父さんとの妹が良かったです。そうすればどちらに似ても可愛かったでしょうに。僕としては母さんに似るよう祈るだけです。

これが僕の家族です」

ばらばらと拍手が起る中、教師や他の父兄陣は冷や汗ものだった。あらゆる意味でロイヤルファミリーの内情など知るだけ自分達の命を縮めるだけだからだ。彼の一族の末子シリスが発表したこの作文は瞬く間に帝国中に広まり、スキャンダルとして巷を賑わせたと言う。

因みに、シリスの実の父親であるシェイス大將は陸軍の兵達から大層同情を集めたとか。

最終通牒（前書き）

これがプロローグになります。いきなり外伝で（汗）

最終通牒

私はディエル帝国空軍第二部隊隊長を務めるルーティシア・バレッタ・レンツァー・ミラコン・スオード・ライデン・ドルス中佐だ。やたらと名前が長いのは両親及び祖父母の位の次期跡取りが私だけだからだ。領土に変えれば実に帝国の半分は事実上私の領土になる。しかし私にとっては迷惑以外の何ものでもない。よく考えてもみたまえ。書類にサインする際には人の三倍あるだろうフルネームをわざわざ書かなければならんだ。書類整理するたびに補佐官達にまで気の毒そうに見られる私の気持ちがわかるだろうか。

少し話が逸れた。皇都一の大邸宅であるこの屋敷には今私一人しかない。なぜかって？生粋の貴族である両親が書き置きだけを残して何度目かの新婚旅行に行ってしまったからだ。我が親ながら呆れるしかないのだがせめて使用人全員を連れて行くのは止めて欲しい。祖父母の代まで全員が各領土を持っているため、本邸から人を呼ぶには少々ややこしい事態になるのだ。この別邸はこの本邸にも入れない私が暮らすためにあるのであって、断じて普段離れて暮らしている両親の逢瀬をする場所ではない。

そんなわけで来客があれば私しか出る者がいないのだ。因みにこの屋敷の規模から考えて、私の私室から玄関まで全力で駆けても三分はかかる。何十日かぶりの休暇を心ゆくまで堪能していた私は、適当にシャツとパンツを引っかけて出てくることにした。貴族令嬢としてはありえないが、寝る時は下着派なのだ。

寝ぼけ眼を擦りながら顔を出した私に来客が固まっている。

「どちら様だ？」

「ぶ、無礼者！私は皇帝陛下より遣わされた勅使だ。ルーティシア・バレッタ・レンツァー・ミラコン・スオード・ライデン・ドルス嬢に取り次ぎを頼む」

「そうか。で、なんだ？」

「貴様私を愚弄する気か！？」

一番偉いのだろう。きゃんきゃん吼える男に片耳を指で押さえながら扉に凭れて欠伸した。今日も眩しい青空だ。絶好の飛行日和だな。

「……………というわけだ！おい、聞いているのか！」

「それでそのお偉い勅使が何の用だ？こちらは夜勤明けで疲れてるんだ」

「おのれ！」

顔を真っ赤にした男が、剣を抜きはなつた。流石にまずいと思ったのか他の二人が止めようとする。私はふつと鼻で笑ってやった。とんだ笑い種だ。間でわたわたしている男に指差して。

「そこのお前。陛下にお伝えしろ。相手の顔も判らないような勅使を遣わすな、とな。寛大な私でなかったら今頃手打ちにしているところだ」

指された男の顔がさつと青ざめる。私が誰だか判つたのだろう、何度も頷き同僚と一緒に引き上げていった。

やれやれとんだ茶番だな。苛立ちを抑えるためにももう一度惰眠を貪りに自室へ戻った。

「…きろ、ルー。ルー！」

「何だ？うるさいぞ」

ぺしぺし頬を叩かれて流石のルーティシアも眠りから覚めた。飛び込んできたのは幼なじみである皇太子カイザークの端整な顔。頬

に柔らかい感触がして、いい加減起きるとルーティシアの上にカイザークの体重が乗る。

「重い」

「当たり前だ。起こしてるんだからな」

「一体いつ私が入室の許可を出した？皇太子が婦女子の部屋に勝手に入るなんぞ言語道断だぞ」

「そっくりそのままお前に返すよ。陛下からの手紙を届けに来た」

「お前が？」

「ああ。どうやらこちらの不手際でお前に迷惑をかけたようだから。あの勅使は減給処分ですんで許してやれ」

皇太子自ら届けるなど余程重要なことなのか。反動をつけて起き上がったルーティシアは寝室を出て机の引き出しからペーパーナイフを取り出した。何の躊躇いもなく封を開ける。しかし読み進める内に段々眉間に皺が寄っていく。カイザークは机に座りながらにやにやと笑っていた。

「どういうことだカイザー。私は断じて、認めない！」

ぱんと両手で机を叩く。握り拳から垂れる血がルーティシアの心情を何よりも顕していた。

「予定が少し早まったただけだろう。これは貴族院で既に可決され決定事項だ。お前に拒否権はない」

「ふざけるな！いくらなんでもこれは…」

「それとも薬を使って無理矢理されたいか？お前の両親や祖父母も全員了承済みだ。諦めろ」

最終通告に力が抜けて椅子に深々と腰掛ける。手の平で覆うと空

を仰いだ。この身が男だったら、自分に兄弟がいたらとこれ程疎ましく感じたことはない。垂れた腕から一枚の紙がこぼれ落ちた。

『ルーティシア・バレッタ・レンツァー・ミラコン・スオード・ライデン・ドルスに命ずる。こちらより選びし六人を婿とし、その子供を次期当主とせよ。もしこれを断るようであれば、身柄は皇族預かりとなる。』

追伸：ごめんねルーシアちゃん。家の馬鹿息子共々せいぜい励んでくれたまえ。仕事の方はちゃんと調整するから子作り頑張つてね。今日の午後には全員ルーシアちゃんの自宅に集まるからよろしく。早く僕に孫の顔を見せてね。あ、入籍はもう済んでるから心配しないでね。

君の義父上より』

顔合わせ1（前書き）

若干、外見の変更です。あと手直し。何にもせずそのままアップしていたことに今頃気づきました。

顔合わせ1

皇帝陛下を殴り飛ばしたい気分だが、生憎皇帝一人を殴ったところで元凶は複数いるのだ。その内の何人かは確実に血縁で、さすがに年寄りに無体な真似をするほど落ちぶれてはいない。

お茶の用意だけしてカイザークを客室に待たせ、一浴びしたルーティシアは出かけることにした。太陽は既に中天を指しているが、朝食を取らねば頭も働かない。しかし料理人がいないために食事がありつけるはずもなく、外で食べることにしたのだ。暇なのかそれとも興味があるのかカイザークもついてくる。

「お前はこんな所で油を売ってていいのか？」

「俺を誰だと？一日くらい抜けたところで問題はない。それよりもルー」

「なんだ？」

「どれだけ食べるつもりだ？」

抱えきれないほどの袋を持ったルーティシアに顔が引きつる。実際には食べ物より、道中に声をかけられる女性陣からの贈り物が圧倒的に多いのだが。宮中でも彼女に憧れる令嬢は多かったがまさか市井でもこれ程とは思わなかった。

特に今日は藍色の大きな瞳に翳りがあるせいか、整いすぎた中性的な美貌が更に引き立つことを本人は知らない。そしてその隣で涼しげな青みを帯びた銀髪に、切れ長の鮮やかな紺碧の瞳を持つ美丈夫がスパイスを利かせていることも。

「二日分の食料だ。私に飯は作れん」

「城に来るか？お前は俺の妻になつたんだし問題ない」

「ふん。私はまだ認めたわけじゃないぞ」

「強情な奴だな。なんなら口づけでもしておくか？」

「それはお前と仲の良いご婦人方にやってもらえ」

馴れ馴れしく回された腕を上手く避けながら、足早に次の店へ向かう。

「嫉妬か？心配しなくても暫くはお前一人だけだし世継ぎもお前の子にするぞ」

「お前は阿呆か。ただの幼なじみに嫉妬なんぞするわけもないだろう」

「ただの幼なじみ、ね」

後ろ手に強く引かれたかと思えば噛みつくような口付けが待っていた。往来であることを憚ることなく強引に奪う。その激しさに若者は赤くなりながら目を逸らし、大人達は囁し立てた。

息すらも奪われ目の前が白くなってきたところでようやく酸素が支給される。ふらつく身体を支えられながら、初めてを奪った男を睨みつけた。

「カイザー。齒を食いしばれ！」

見事な回し蹴りがカイザークに入った。

「全く、俺の広い心に感謝して欲しいな。いや、むしろ最上級に褒め讃えろ」

「却下だ。乙女の唇を奪ったお前が悪い」

「ルー。皇族に手を出すなんて国家反逆罪だぞ」

「未婚の娘に不埒な手を出した馬鹿の方が尚悪い」

「だから俺達はもう夫婦だって」

「知らん。私は同意した憶えもなければサインした憶えもない」

堂々巡りを繰り返しながらようやく我が家に辿り着いた。が、即座に回れ右して元来た道を帰ろうと！？

「どこに行く気かな？奥さん」

「よくやった、トリス、クリフ」

「ちゅ、中将殿？と文官の」

「クリストファーだよ。よろしくねルーちゃん」

見事な体捌きでルーティシアを抑えているのがルーティシアの上官であるトリス中将で、眼鏡をかけた伊達男が副宰相のクリストファーだ。まさかと嫌な思いが過ぎる。

「あ！お帰りなさいルーシアさん。今日も素晴らしく綺麗ですね。愛してます。やっぱり俺と貴方の運命は繋がってたんですね。ようやく俺との結婚を承知してくれて嬉しいです。絶対幸せにしま……ぐぼあ！」

「うるさい。黙れ。変態」

「シェイス殿。鍋が沸騰してますよ。……おや？貴方がルーティシア・バレッタ・レンツァー・ミラコン・スオード・ライデン・ドルスさん？噂はかねがね聞いております」

なぜ彼等がルーティシアの屋敷から出てきたのか。半ば確信に誰か嘘だと言ってくれと願う。

「シェイスさん！大丈夫ですか？」

優しい風貌をした栗色の髪をした少年が、幸せそうに倒れているシェイスを介抱している。人生最大の厄日だ。

顔合わせ1（後書き）

未だ六人の旦那が出てこないorz。
困ったなあ。

外伝② お茶会 (前書き)

ルーテシアとカイザークの息子視点です。
自分で書いててしっくりこないです。
難しい……。

外伝2 お茶会

私は今義母上とお茶を飲んでいる。生みの母上の名はルーティシア・バレッタ・レンツァー・ミラコン・スオード・ライデン・ドルス。

その血筋から貴族の中の貴族と呼ばれる空軍少将だ。戸籍上、義母上の息子として私は暮らしている。なぜなら母上はあのローデルの英雄、シェイス殿と暮らしているからだ。複雑な事情により兄弟達は全員父親が違う。父上と母上は元々幼なじみで、身分血筋どちらも申し分なかったのだが、母上が嫌がった。

なんだかんだでシェイス殿を一番愛しているのだろう。母上が子供たちを愛しているのは判っているので私達が末の弟に対して思うところはない。末の弟は不満そうだが。母上を一番愛しているのもシェイス殿だろうし、私としては母が幸せであればそれで良いのだ。

「レオ？どうかしたの？」

「ああ、いえ。そういえば今週は我が家で晩餐会だったなと思い出しまして」

「ええ、とっても楽しみ。ルーシア様に久しぶりに逢えるんですもの」

ここだ。我が母上は大変女性におもてになる。

普通なら父上を挟んで母上と義母上の三角関係と、流行の恋愛小説並の泥沼が起きてもおかしくないのだが、義母上が変わっているのか父上と母上の娘が欲しいと言い出す始末。

（因みに恋愛小説は臣下に押しつけられただけで決して私の趣味ではないと付け加えよう）

とにかく義母上はご自分で産む気はないらしい。息子の目から見ても義母上と父上はそれなりに仲睦まじい夫婦（政略婚にしては）だと自認しているのだが、それ以上に母上への憧れが勝るらしい。これ程権力に興味がない人間も珍しいのではないだろうか。母上を正妃として自分はいくまで側妃に徹するつもりだろうか。極まりである。

「シェイス殿が嫉妬なさいますよ？」

「良いじゃないの偶には。シェイス殿はいつもルーシア様を独占なさっているのだから、偶には陛下に譲って頂きたいわ。陛下とルーシア様はとてもお似合いなもの」

うつとりと頬を染めながら想像する義母上。

ああ、母上。狙われておりますよ。これではシェイス殿も油断できないわけだ。先日弟の件といい、男として同情禁じ得ない。

男女で取り合う図が出来てしまうのが母上の魅力なのだから。当の本人は、言っては悪いが男以上に男らしい。

入軍志望の若者の大半が憧れの人は？と問えば、九割は母上の名が上がる言っても過言ではない。母上が軍服で社交界へと出ればハーレムが出来上がるのだから。

あの光景を初めて見た時は唖然としたのを憶えている。父上は苦笑していたが、義母上の姿も実はその中であつたと明記しておく。

これでは夜会を開く意味がないと年頃の娘を持つ貴族達がこぞつて父上に訴えたので、数年前に母上は軍服での参加を勅令で禁止された。

その後はドレスを着るようになったのだが、今度は男達の目を惹きつけるようになり、逆現象が起こっている。勿論母上の周りには父上方が陣取っているのだが、馬鹿な勇者はどこにでもいるのだ。

当然そんな輩はいつの間にか城を去っていることだろう。そんな

わけで母上は皇帝主催の夜会以外は参加禁止にされている。

なぜ皇帝主催の夜会だけは除外されているのかって？今度は母上の熱烈なファンから泣きつかれたからだ。怒った夫人や令嬢方がこぞってストライキという前代未聞の珍事に、泡を食った旦那や父親が前言撤回を求めたのである。さすがに不敬に当たると皇帝主催の祭事は出席していたが、その年の夜会開催率は例年の3%以下という驚異的な数字を弾き出した。それに伴い、婚姻率の低下と最早一人だけの問題ではなくなったのである。母上を気に食わない貴族達も認めざる負えなかったというわけだ。

私が学んだのは、兎に角、女性を怒らせてはいけないということ。家を守るのが女性の役割だと侮る事なかれ。彼女らは立派な牙を持っている。

その意味で、派手な女遊びをしている直ぐ下の弟の行く先が不安なのだが、あれでそつなく立ち回っているので大丈夫だろう。弟を亡くすのは私とて悲しいのだから。

「貴方も一人では寂しいでしょう？折角ですもの。補佐をしてくれる弟か妹が欲しくないかしら」

「おや。義母上もようやくその気になられたのですか」

「まさか。今宵はまたとない機会ですもの。陛下には頑張っていたかねば」

どうやら義母上は本気らしい。義母上が興奮しながら話す計画と、小鳥の囁きを耳にしながら、私はゆっくりカップを傾ける。

本日も平和で何よりだ。

この後、私に新たな兄弟が出来たかどうかは神のみぞ知る。

外伝2 お茶会 (後書き)

結果は外伝1を読めば分かります、はい。

舞踏会1（前書き）

時系列的には、旦那と顔合わせしてしばらくの頃、です。

舞踏会1

「えーじゃあ今日のルーシアちゃんは殿下のパートナーなんだ。だつたら僕も誰か適当に見繕わなきゃ」

「仕方ありませんよ、クリフ。シーズンの始まりを告げる皇帝主催の夜会ですから諦めましょう。勿論私達とも踊ってくださいね、ルーシアさん？」

耳にかけた銀の髪が流れ落ちるのも構わずシェランがルーテイシアの右手にキスを落とし、クリストファーが怠そうに肘掛けに乗りながらこてんとルーテイシアの頭に頬を載せる。

いくら冴え冴えとした美貌であろうとも暑苦しい行為は決して涼しくはならないのだ。

「皆さん楽しんでくださいね」

まるで他人事（実際他人事なのだが）のように微笑ましく絵を描いているレーデルカ。

纏わりついてくる男達に諦めの息を漏らしながら、どこで間違つたのだろうと遠い目をした。

「他の男に見立てさせたのは気に入らないが、悪くはないな」

上から下までとくと見回したカイザークがゴーサインを出す。不機嫌と書かれた顔にキスを落として出て行った。侍女達の黄色い声が上がる。

女と違い、支度に時間がかからないので、直ぐに迎えに来るだろう。

「あの皇太子殿下がわざわざ見に来られるほど愛されていてらっしゃいますのね」

「こちらはトレアス卿の見立てなのでしょう？さすが洒落者の異名は伊達ではないですわ」

この日の装いは、ルーティシアの瞳に合わせた藍色のドレスだ。女性にしてはやや高めな身長を生かし、藍から黒へと流れるようなグラデーションのロングドレス。

皇家特有の銀に青を溶かし込んだような髪は丁寧に上げられ、ほっそりした項にわざと後れ毛をそのままにして、甘い色気を醸し出していた。アクセサリーは手首の細い銀の鎖だけで、瑞々しく鮮やかな真紅の薔薇が髪を飾る。

そっけないほどシンプルだが、ルーティシアの持つ硬質な美しさをより引き立てる。高嶺の花を演出することで、少しでも近づく男を減らそうとする送り主の思惑を見事に体现していた。

素晴らしい出来映えに、うっとり侍女達が見つめているとも知らず、慣れないヒールで室内を歩き回る。

股がすーすーして落ち着かないな。

日頃、制服を身につけているルーティシアは大半をパンツで過ごしているため、久しぶりに纏ったドレスに違和感を禁じ得ない。常のように、大股で歩くのははしたないので、小股で歩くよう注意しなければ。

何度も往復して、昔の感覚を思い出しているとカイザークが顔を出した。外を見れば、赤い光は落ちて夜の帳が開いている。

「今更緊張か？そんな可愛い性格してないだろう」

「ただの歩き方の練習だ。最後にドレスで出席したのは何年も前だから変な感じ」

「俺の成人の儀、以来だったか。一度ダンスでも練習してみるか？
その凶器で足を踏まれるのは勘弁してくれ」

「知らん振りするのも紳士の務めだろう」

そう言いつつも、合図をすれば侍従が家具を退けて即席の舞台を作り上げる。向かい合った方がいいが、早速カイザークが奇妙な顔をした。

「……俺に女役をやらせるのか？」

「ん？ああ、そうか。こちら側で踊る方が多いものだからつい」

組み直して、カイザークの口ずさむ音でステップを踏む。子供の頃は何度も踊った仲だ。両者の呼吸はぴったりと合い、端から見れば優雅に踊っているようにしか見えない。しかし、踊りきったルーティシアの顔は厳しいものだった。

「2回。前より鈍くさくなっただな」

「それはお前のリードが下手なせいだろう」

「自分の否は認めろよ。俺のリードは完璧だ」

「パートナーをいかに上手く導くかが腕の見せ所だ。つまり、私が失敗したのはお前のリードが下手なせいだ」

「そこまで言うなら手本を見せてみるよ」

「上等だ」

売り言葉に買い言葉。すったもんだしている内に、なぜか男役がルーティシアを、女役をカイザークが務め、踊りだす。いつまで経ってもやってこない二人に痺れを切らした王の侍従がやって来るまで、延々二人はリードの覇権争いをしながら踊っていた。

舞踏会 2

大陸でも有数の歴史を誇るディエル帝国。時の有名な建築家によって築かれた大広間は、大国の名にふさわしく豪華だが洗練されている。一部の特権階級にしか入場を許されず、そこで開かれる宴に出ることは乙女の永遠の憧れだ。

今年初めて社交デビューする令嬢達は、親や知人に囲まれながら夢の晴れ舞台に落ちつきなくそわそわし、男達は目当ての女性を求めて中継ぎを頼んだり、直接親と交渉する。

特に適齢期の男女は親族総出で見合い合戦の根回しをするので忙しい。

「そう考えると僕らって気楽だね」

「親戚から体良く子守を押しつけられてますけどね。トリス殿も同じですか？」

「……ああ」

「俺は親戚から敬遠されてるから楽ですよ？」

この国で一番尊い女性に婿入りした四人は、それぞれのパートナーがいらないのをいいことに壁際で花を咲かせていた。社交に明るく見栄えもいい、奥さんがいるから安全と、親族からパートナーの決まっていない令嬢のエスコート役をこれ幸いと押しつけられたのだ。さすがに主家へと婿入りした男達に手を出す気はないらしい。

しかし既婚者。結婚相手を探す令嬢達に四六時中くっついていくわけにもいかず、適当に独身男性を紹介して逃げてきた。彼等はあのルーティシア嬢の婿である。本人が出席することもあって、彼等を誘う勇者は残念ながらない。それ即ち五家を蔑ろにすることに

なるからだ。

「ルーちゃん早く来ないかな？暇だよ」

正式な宴の席では、既婚者が最初に踊るのは正式な相手。妻または夫と決まっている。

「そんな焦らずとも間もなくでしょう。今宵のドレスはクリス殿とレーデル力殿がデザインしたと聞いておりますが」

「どんなデザインにしたんです？」

「それは見てのお楽しみ。でも絶対似合うことは保証するよ」

口到人差し指を当てる姿が色っぽくて、それを目撃した夫人がふらつと倒れる。開会前だというのに倒れてしまった夫人をパートナーの男性が慌てて運んでいくのを横目に、四人？は始終和やかだった。

皇族の入場に人々が膝を折り迎える。皇太子に腕を取られながら入場したルーティシアは、視界にこっそり手を振る男達を見つけて緊張の糸を緩めた。小さくあいつら何やってるんだと舌打ちするのが隣から聞こえる。

それにしても眩しい。影なんてないのではないかと思うくらいの光源が灯され、この日のために誂えたのであろう色とりどりの煌びやかなドレスや宝石が光を反射してちかちかする。決死の覚悟で襲撃すれば今ならせいこうするかもしれないと埒もないことを考えていると、横で腕を引かれた。所定の位置を危うく通り過ぎるところだ。その後は他の者と同じように頭を下げて皇帝を迎える。

普段はアレだが、真面目にやれば、威厳に満ちて見えるから不思議

議だ。平素のギャップを考えれば致し方ないだろう。

短い口上で宴が始まる。初めの音楽は皇帝夫妻のためのもので、その次からダンスに加わる。

それにしても、先程から殺気はないが多くの視線を感じて落ち着かない。注目を集めるのは慣れているが、殺意や嫉妬とはまた違っている。

目が合えば慌てて逸らされるし、一体何なのだ？

「気持ちが悪い」

「酔ったか？」

「いや。身体がむずむずして落ち着かない。恰好がおかしいのか？」

暗色が悪かったのか。それとも地味すぎるのか。

ステップを一瞬だけ止めたカイザークが奇妙な顔をしている。

「昔っから鈍いな」

見惚れているだけだとなぜ気づかないのか。当時でさえちよつとした噂になっていたが、成長し、大人の色香を纏うようになったこいつを放つてく人間はいない。皇家特有の青銀の髪を持つ人間など限られている上に、皇太子が踊る人物は一人しか該当しないので当然誰かは判っているのだろう。

男達の熱い視線を時折牽制しながら、ダンスを終える。会場中の視線を浴びながら二人は、旦那達の元へ。

「お疲れルーちゃん。そのドレスよく似合ってる。たまにはこういう恰好もいいでしょ」

「ズボンに慣れているから違和感がするな」

「そう？ルーシアさん、家ではいっつもそんな……」

名譽のためにトリスがシェイスに肘鉄を食らわせる。他三人の男達も無言で軽蔑を送った。日頃はともかく紳士としてマナーの心得はあるのだ。

トリスがぼんとルーティシアの頭に手を置いて目元を緩ませる。

「綺麗だ」

嘘なんて言わない人なので、素直な讃辞にルーティシアはぼんと顔が赤くなる。

「一曲踊ってくれるか？」

断る理由もなく頷いた。ぼうつとしながら腕を引かれていく。

「ああ、ほら。ルーシアさんをトリス殿に取られてしまいましたよ」

「ええ！？ルーシアさん」

「本当だ。さすがトリスは上手いな」

無駄のない手腕に感心していると、皇太子目当てに恐る恐る人が集まってくる。つられて、遠巻きにしていた連中も今がチャンスと三人を囲む。

「殿下。お次は私の娘などいかがですか？」

「クリストファー様。一曲が終わりましたらわたくしと踊ってくださいまし」

「ベーネンルグ卿。よければこちらで先日のお話など」

「珍しいですなスクオーツ少将。折角だから軍議について語り合おうではないか」

何度も言うが、彼等は容姿、家柄、地位のどれをとっても優良物件。例え結婚していようが、第二夫人、第三夫人を狙う貴族は多いのだ。あわよくば今の内に気を引いて、再婚しようと狙っている女性も少なくない。本来なら離婚など滅多な理由がない限り許されないのだが、彼等に限っては例外で、子供さえ作ってしまえば、両人の了解があれば皇帝の名で離婚してもいいと認められている。

婚姻を結んだのは、あくまで爵位を継ぐ正式な跡継ぎを作るためののだ。絶対権力を持つルーテイシアを敵に回したくないが、彼等との婚姻は旨みがある。だから隙さえあればこうして群がってくるのだ。”待て”の効果効くのは、一曲を踊り終えるまでである。

顔合わせ2

「ほほ。最近連絡もよさないから心配しましたよ。ねえ貴方？」

「……ん。なんかいったか？」

「いい歳こいて昼寝なんぞするでないわ！」

「主がいうことかえ？どちらもじじいには変わらないだろうに」

「なんじゃと！儂はまだぴっちぴちじゃ」

「お二人とも相変わらず仲が良いわねえ。もう一人頑張ったらいかが？」

「……それには激しく同意ですよ、お祖母様」

連れ去られるようにして押し込められた馬車には、双方の祖父母が勢揃いしていた。錚々たる顔ぶれに、当然護衛も半端ない数がつけられている。それぞれの私兵に混じって近衛兵が混じっているのは恐らく皇帝に命じられたからだろう。後ろに皇太子が乗っているはずなので、物々しい警護なのも当然か。

歳を理由に政から一線を引いて半ば領地に引きこもっている面子が、こうして帝都までやってきた。この意味が判らないほどルーティシアは愚かではない。それにしても、朝の騒ぎから今に至るまで手際が良すぎる。嵌められたと思った時には遅く、こうして逃げられない状況まで追いつめられていた。

護衛は同時に監視も含まれているのだらうと、そこまで推測して小さく溜め息をついた。

「あらあらルーちゃんはお疲れかしら？」

「若いもんがこんな朝早くから疲れるなど言語道断！鍛え直してやるつか」

「休日くらい休ませてくださいよ、お祖父様。それでも忙しいんです」

「……問答無用」

「ハロルドお祖父様まで!？」

「ほれ笑うのじゃルーシア。折角ハロルドが冗談を口にしたのだ。空気を読むのも社交術よのう」

「高度すぎてついていきませんよ、お祖母様」

なぜ4人ともこんなにハイパワーなのだろうか。いい加減隠居してくればいいのに。いや隠居してくれても、これ以上領主の仕事を増やされては困る。ただでさえ、王都での仕事を引き受けているのだ。空軍に士官したのは、なるべく爵位から逃れるためでもある。

「逃げる算段を考えても無駄だぞ。この日のために、精鋭を連れてきたからな」

「どうせ今度開かれる武闘大会に出場するため連れてきたのでしょ
う?」

「そこは私のためにとかなんとか驚くものだぞ」

「馬鹿じゃ」「お馬鹿さんね」

二人の女性からそれぞれ厳しい指摘を受けて凹む祖父を尻目に、窓の外は今や城門をくぐり抜け、目を楽しませるただけに莫大な費用をかけて維持されている広大な庭を写している。その桁数を見れば目が飛び出ること間違い無しだ。十人の庶民が一生を稼いでもまだ足りない金額である。税金の使い方が間違っていると思うのだが、これも”国力を見せつけるため”なのだから仕方ない。

一部の特権階級だけでなく、定期的に市民に開放されているだけマシだろう。何でも樹齢。千年を越える巨大な樹の下でプロポーズすると実するという奇妙なシンクスまで出来ているらしい。開放され

る時期になると、毎年どの女性がルーテイシアを射止めるかで賭まで行われているとは本人の与り知らぬことである。

諦め模様で黄昏れている内に、馬車は許されている中の一番奥で停まっていた。この入り口を使うことが許されているのは、王族及び王家の血を継ぐ三公爵のみだが、今回は特別に許可が出たらしい。皇太子の学友として過去に呼ばれ、幾度となく通ったこの道をこれ程憂鬱な気分で歩くのは初めてだ。

唯一の味方であろう男は、ルーテイシア以上に強固に、正確に言えば、腰の獲物を奪われた上で上半身から首まで隙間なく縄で捲かれ、更には両手足に手錠付の嚴重体勢で近衛兵に囲まれながら歩いている。

なぜ知り得るはずのない、奴との関係が知られているのかという驚きはない。どれだけ巫山戯た男であろうとも相手は大国を統べる皇帝なのだから。

「いくらシェイスでもあれは可哀相じゃないか？」

「お前はあれを見てないから……。あれは化け物だ」

視線を逸らすカイザークに、自分がいない間にどんな攻防があったのか是非とも知りたいところであったが、口を開く前に目的地へたどり着く。この国の紋章が中心に描かれた、蒼い染料が採れる貴重なアコリヤ貝がふんだんに使われている扉が、常駐する近衛兵によって開かれる。

任務を終えて一瞬気が緩む隙を探していたのだが、どうやら言い

含められているのか緊張が包んでいる。

……お見通しというわけか。

最後に逃亡する機会を失ったことに対する落胆を顔に出すことはない。カイザークに促されるまま、ルーテisiaは肩を竦めて扉の中へと消えていった。

頭を下げた先に扉の空気が抜ける音を聞いて、近衛兵達は強ばった身体を弛緩させた。高まった緊張が霧散する。

「漸く終わったな。これから一体何があるって言うんだ？」

軍の中で彼等を知らない者などいないだろう。

ドーランの英雄に加え、既に次代の宰相や噂の魔術師、更には、国の重鎮と目される公爵閣下や侯爵閣下まで来ているのだ。錚々たる顔ぶれに、彼等が戸惑うのも無理はない。その中で雪華の魔女とも呼ばれているあの女傑、ルーテisiaの逃亡阻止まで含まれていたのだから。

給料二倍くらいでは足りない働きだった。

顔合わせ2（後書き）

おいしいい！？旦那達どこ行ったよ？じいさんとかばあさんとかどうでもいいじゃんよぉ！

てなわけで、更に次回まで持ち越して事d…ぐはぁっ（吐血）
父さんにも殴られたこと無いのに（TT）（↑嘘です）

10/25 家の事情により、これから2、3週間ほどインターネットに接続できない状態とかお知らせしましたが、あれはなしになりました。詳しくは活動報告にて。

舞踏会3

その様子を視界に収めながら、ルーティシアも同様に囲まれていた。幅広の背中が守ってくれているが、こういった場に慣れていないトリスも上手く逃げられないでいる。

「姫。愚かだと思われても良い。私を貴方の求婚者として考えていただけないでしょうか？」

「申し訳ないが、私は既に婚姻を結んでいる身だ」

「存じております。ですがあくまで政略、私は姫のお心に沿いたいのです」

これ以上の面倒は沢山だ。これでも一応、大変不服だが、既婚者の私に言い寄るとはこういう神経をしているんだ？

家名を狙って寄ってくる者なら簡単にあしらえるのだが、今回の連中はどうやら系統が違うらしく、ルーティシアは困惑していた。先程からはつきり断っているのにしつこく食い下がってくる。シェイス並みに鬱陶しい。元来気が長い方ではないルーティシアが物騒なことを考えていると、丁度頃合い良く腰を攫われる。上品で清涼な香りが鼻腔を攪り、面倒事は任せておこうと大人しく預けた。勿論、抗議を込めて踵の高い靴で足を踏んでおくことも忘れずに。

素知らぬ顔で埋めるルーティシアを一瞥し、痛みに引きつるのを耐えて向き直る。

「人妻に手を出すのは止めて貰おうか？」

「こ、皇太子殿下」

「君が僕以上にルーちゃんを満足させられるとは思わないけど？」

「しつこい男性は嫌われますよ」

「ルーシアさんを侮辱するのは許しませんから。この場でなかったら決闘でも申し込むところですよ」

「侮辱などとは」

「妻に不貞を働けと唆しておいて？不愉快だ」

談笑していた者達は口を噤み、ダンスの途中で足を止め、広間の誰もが注目している。男に向けられるのは侮蔑に満ちた眼差し。ようやく己の失態を悟った男は、蒼白にしながらも非礼を詫び、足早に去っていく。皇太子の不興を買ったあの男は、今後宮中に入りすることはないだろう。

何事もなかったように、クリストファーが腕を取りホールへと導いていく。周りも興味を無くしたのか、ダンスを再開し、各々会話に戻っていく。

「……やりすぎではないのか？」

くるりとターンを決めながら、ルーシアは言う。

「ルーちゃん笑顔、笑顔。折角踊ってるんだから楽しもうよ」

「クリス」

「ええ」。面倒だから殿下にでも聞いて下さい」

（あの人は昔から貴方のことが好きですからね。本人に全く気づいかれてないのが笑えるけど）

少なくともカイザークとシェイス以外はまだルーテイシアに対して、恋愛感情を持っていないだろう。トリスやレーデルカはどちらかといえば妹のように接しているし、シェランは様子見といったところ。そしてクリストファーは。

「居心地が良すぎて困るよ」

一つ屋根の下で暮らしていれば、さすがに常に気を張っているわけでもなく、互いに自然体で接している。プライベートに踏み込まれても嫌悪感を全く感じないことにクリストファーは驚いている。さばさばしている性格のせいかな、男らしさが際立つせいかな。

「え、おい。クリス！？」

急にステップを変えたクリストファーに、戸惑いながらもついてくる。勘の良さは運動神経がずば抜けているせいだろう、さすが伊達に二つ名が付いているわけではない。

今はまだ、この距離感に安心している。近い未来、選択を迫られることになるだろう。お互いに。それまでは、どうかこのままで。

火照った身体を冷やすために、開け放たれた庭へと逃げてきたルーティシアは、絶世の美女、ではなく美男の姿を発見した。

「疲れているようだな」

「おや、ルーシアさん。貴方も休憩ですか？」

「まあな。やはり慣れないことはするものではないな」

柵に身体を預けて空を見上げる。地上の喧騒とは裏腹に、夜空は静謐を保っている。行儀悪い恰好を咎めるでもなく、シエランは肘を柵に立てて暗い庭へと視線を落としていた。

「すまないな。私のせいだ」

篝火に照らされた横顔からは何も読めない。だからシェランも敢えて問おうとは思わなかった。広間から漏れる音楽が途切れる。どうやら一曲が終わったらしい。

「そのドレス。よくお似合いです」

ルーティシアは隣の人物へと視線を戻す。どんなに素晴らしいドレスでも彼の者にかかれば、その存在を霞ませてしまうだろう。

「世辞か？」

ふ、と苦笑を洩らすルーティシアに、情けなくも違つと首を振るシェラン。その様子がおかしくて笑ってやればばつが悪そうにそっぽを向いた。

「すまん。だが私よりもドレスが似合いそうな者に言われてもな」

「笑い事ではありませんよ、全く。私だけでなく、そのドレスを贈ってくれた者にも失礼です」

「では後で二人にも謝罪しておこう」

「貴方は……いえ、そろそろ戻った方が良いのでは？」

「そうだな。面倒だが仕方ない。シェランはもう少しここに居るといい。誘蛾灯の役割を果たしてくる」

手を振り戻っていくルーティシアの背を、シェランは何時までも見つめていた。遠目にも、ルーティシアの姿を見つけた輩が群がっていくのが判る。確かにあれだけ引きつけてくれれば、会場内でシェランが目立つこともあまり無いだろう。気遣いをありがたく思うと同時に護られている自分が悔しくもある。いつまでも逃げている自分とは大違いだ。

出会い〜シェイス〜（前書き）

変態シェイスとルーシアの出会い編。いつもより長いですが、分けるのもどうかと思いましたので頑張ってお読みください。

出会いシエイス

「愛している、か。こいつにとってその言葉ほど嘘くさいものはない」

膝枕をしながら髪を梳く母に、息子は首を傾げた。こいつと呼ばれた義理の父親は、母の膝を独占して気持ちよさそうに眠っている。

「シエイス殿は母上を心の底から愛していらっしゃるのでしょうか？」

傍目から見て可哀相なほど素っ気なくされているにも拘わらず、めげずにアタックしている父親の姿を息子はある種の尊敬を抱いている。たった一人に愛を捧げる父親は、自分の実の父親と違って格好いい。なんせ、父と来たら母を差し置いて年中他の女の尻を追いかけて回しているのだ。仕事は出来るが家庭を顧みない父親を彼は嫌っている。それを母上に告げればあっさりと離婚しそうで、もしそうになったら彼は父親に引き取られるだろうから絶対口にしない。(数年後には父親と母親の奇妙な関係を知ることになるのだが、現時点で彼は知らなかった)

「愛にもいろいろある。例えば私はお前を愛している。それは親子に注ぐ愛情だ。他の父親達もそれは変わらないだろう？」

彼はこっくりと頷いた。彼には上に4人の異父兄がいるが、どの父親も平等に子供たちを愛してくれている。

「こいつの愛情は何というか、ひどく歪だ。愛にもそれぞれあるが、これほど捻くれた愛も珍しいだろうな」

辛そうに目を細める母上は、瞬きしてそれを隠す。それは、彼が産まれる少し前の話だった。

ルーティシアとシェイスが初めて会ったのは、戦場だった。後にシェイスがドーランの英雄と呼ばれることになるドーラン戦争。元々ドーランとは、国境沿いにある大きな街でスオード領の一部だった。12歳だったルーティシアは嫡子として、侵略してきた隣国を掃討するために戦場へと駆り出された。

シェイスはスオード家の分家筋の次男坊だったが、実の両親に疎まれて産まれて直ぐに公爵家の騎士を務めていた叔父へと預けられていた。才能があつたのだろう、剣の腕は齡17にして、騎士団にこの人有りと言われた叔父を凌ぐほどだった。シェイスは強かったが、心は空虚だった。シェイスは環境のせいか愛を知らない子供だったのだ。叔父は常々後悔していた。育ての親らしい愛情を注げなかったことに。叔父は戸惑っていたのだ。元より子供に好かれる性格をしておらず、彼の人生は剣に捧げていたから。兄から半ば押しつけられるようにして引き取った子供にどう接すればいいのか分からなかったのだ。

「剣は人を守るものだ。そして傷つけるものだ。自分が守りたいもののためにだけ剣を振れ」

叔父がシェイスに教えた心構えだ。シェイスは理解できなかった。そんなシェイスを察したのか、叔父はぽんと頭を撫でただけでそれ以上言おうとはしなかった。結局シェイスが理解する前に、突然隣国が攻めてきた。

叔父もシェイスも騎士だ。当然真っ先に戦場へ向かった。そこは覚悟も何もない若者には地獄だった。戦場を目の当たりにして、シェイスは初めて恐れを知った。生きるか死ぬかの世界。鍛錬のように寸止めなどしてくれない。ここに来てシェイスは自ら剣を振るうことが出来なかった。人の命を奪う、その重さに耐えられなかったのだ。恐怖に怯える騎士を逃す敵兵ではない。死を目前にしながらも身体が動かなかった。来る衝撃を覚悟したシェイスだが、寸前でそれは来なかった。代わりに、彼の前には剣を突き刺された叔父と倒れる敵兵の姿があった。

「……んで。なんで俺を庇ったんだよ！あんなら避けられただろう」

「はは……。親らしいことを全然してやれなかったからな。最後くらい……。いいじゃないか」

「訳分かんねーよっ！」

傷の具合を見て、もう助からないと悟る。なぜか分からないが悔しかった。とつくの昔に忘れていた涙が地面に染みを作る。

「なあシェイス。俺は幸せだったんだ。こんな無愛想な息子だったが、ごほつごほつ。……。いいか、よく聞け。お前に愛って言っても分からないんだろう？だったらお前のために泣いてくれる人間のために剣を振るえ。それならわかるだろう、いいな？」

シェイスが頷くのを確認して、痛いほどシェイスの腕を掴んでいた腕は力無く地に落ちた。いつの間にか敵兵がいなくなっていることも今の彼には気づかなかった。

皇都から派遣された援軍を連れて駆けつけた時にはひどい有様だった。老若男女関係なく、見つけ次第片っ端から屠ったのだろう。中には赤子や陵辱されたと思われる死体もあった。こみ上げる吐き気を堪えて、ここまで運んでくれた騎竜兵に礼を言っただけに降り立つ。腐臭や焦げ臭い臭いが鼻を突いた。上から見た限り、戦況は圧倒的にこちらが優性。今日中に決着がつくだろう。

「姫様！こちらへ」

護衛の兵士に導かれるまま即席で張られた天幕へと入る。そこには今回の責任者であるアドス大將と、先だって派遣した公爵領の騎士団長ディテウスが待っていた。ディテウスの方は驚いている。

「ルーティシア様！？なぜ貴方がここへ……」

「状況は？」

「敵方に魔術師がいたようで少々手こずっておりますが、間もなく追撃に転じます。騎士団の者達がよく持ちこたえましたな」

魔術師が一人いるだけで、一般兵の十人分の働きを考えると考えれば、今回の大規模な進軍によく持ち堪えられたものだ。さすがに一地方の私兵だけで国を相手にするのは難しい。

「……騎士団の損害は？」

「死者四千名、負傷者一万五千名に達すると思われます」

公爵領が抱える私兵の総数は三万。内一万は、今回の侵略を機に不穏な動きが出ないよう各所で見張っている。相手は十万もの大軍と考えれば奇跡とも云える数だろう。援軍として十万、しかも魔術師や騎竜を連れてきていることを鑑みれば、勝利は間違いない。

ルーティシアは湧き上がる激情を抑えて淡々とやるべき事を紡いだ。時折もたらされる情報を整理しながら指示を飛ばしていく。

戦局は予想通り、僅か一日で収束した。公爵の名代として、終わってからの方が仕事は沢山ある。街の被害確認及び復興支援、住人の補償、死んだ者達の弔い、軍の駐屯手配など多岐に亘る。その合間を縫って、騎士団へと顔を出したルーティシアは、広がる無数の死体を前にして立ちつくしていた。それでも震える膝を無視して、一つ一つ顔を確認していく。

騎士団に混じって訓練していたルーティシアとは顔見知りの者も大勢いた。中にはルーティシアと同じ年頃の子供を持つ者もいて、嫡子であるルーティシアを可愛がってくれた。侵攻を拡大させないために命を落としていった者達。隣ではディテウスが肩を震わせて泣いている。

あの時あすればもつと生き残る人間がいたのではないだろうか？などと後悔が渦巻く。しかし、動揺を見せるわけにはいかなかった。まだやることがある。彼等の死に報いるために動かなければならない。

ルーティシアは足を止めた。そこには、一人の若い騎士が亡骸の前で微動だせず座っていた。その亡骸はルーティシアのよく知る人物であった。スオード公爵が抱える騎士団でも一、二を争う程の腕を持ち、分家の名を持ちながら一介の騎士として働いていた寡黙な人。

「お前は彼の親族か？」

答えを求めてはいなかった。常になく安らかな顔で眠っているのを見て、満足して逝ったのだと判った。

「ドニス私の剣の師匠の一人だった。ジルは宿屋の息子で、よく昼食と一緒に食べた。トーニはいつも息子自慢ばかりしていた。アビーは顔に似合わず花が好きだった。コニットは爺と同じくらい口うるさかった。ロドニー、サーエ、トリット、モガブ……すまない」

感傷だ。全てが終わるまでは我慢するつもりだった想いがここに來て決壊する。気を張っていてもまだ子供だ。大人でさえ目を背けるような血生臭い光景を目にしながらも、冷静に指示を出す姿に、周囲が心配していることをルーティシアは知っていた。名代として毅然と振る舞わねばならないことも。知らない人間だったからこそ、彼女は緩んだ気持ちを吐露できたのだろう。

「雨？」

シェイスは初めて顔を上げた。雨だと思ったそれは、風で流れてきた少女の涙だった。遠くを見つめながら静かに涙を流す横顔を美しいと思った。

「何で泣く？」

声をかけられた少女は吃驚したようだ。安全とはいえ年端もいない少女がなぜいることに疑問はさしてなかった。

「大勢の人間を亡くしたからと本来なら言つべきだろうが、私はそこまで聖人ではない。身近な人間を亡くしたら悲しい。それだけだ」

少女は叔父を知っていた。叔父の死を悼んで泣いている。シェイスの脳裏に叔父が最後に残した言葉が蘇った。

叔父は彼女を守るために剣を振るったのか？

俺が彼女を守るために剣を振るったら、俺のために泣いてくれるのか？

その泣き顔を俺にくれるのか？

「あんたは俺が死んだら泣いてくれる？」

シェイスは本気だった。訝しげな少女は探るように見ていた。

訳が判らない。

見知らぬ人間に、死んだら泣いてくれると聞かれて即座に答えられる人間などいるだろうか？からかっているのかとも思ったが、本人に至っては真面目な様子。

「多分泣かないだろうな。先程も言ったが、知らない人間に泣くほど出来た人間ではない」

泣く振りは立場上出来るが、彼が求めているものとは違うだろう。

率直に答えただけなのだが明らかに若い騎士は落胆していた。人形のようなと思ったのは錯覚で、実は表現豊かな奴だったのか。

「なあ。だったらどうすれば泣いてくれる？俺はあんたの泣き顔が欲しい」

…… 新手の変態か？

ルーティシアがそう考えるのも無理はなかった。

蔑むような眼差しもいいな……ではなく、こういう時どう伝えればいいのか判らない。

あの綺麗な泣き顔を手に入りたい。初めて彼は欲した。

「なんて言ったかな、叔父貴。えーと、うーん。そうだ！愛、だ。俺があんたを愛したら、あんたは俺のために泣いてくれる？」

叔父の言葉は、見事に曲解されていた。

ルーティシアは絶句し、本気で彼のおつむを疑った。何かが違うというのはルーティシアでも判る。一方的な愛を捧げられたところで、捧げられた側が迷惑だったら寧ろ清々するのではないだろうか。ある意味では喜びに泣くかもしれないが、違うだろう。

頭が痛くなってきた。

「決めた。俺はあんたを守るために剣を振るうよ。あんたを愛する

と決めたから、もう迷わない。だからあんたは俺のために泣いてくれ」

嫌な予感がする。ルーティシアが逃げようとするよりも、相手の方が速かった。足元に仄白い魔法陣が展開される。

『我シェイス・スクオーツは汝を唯一の主と定め、いかなる時も汝の剣と化し、汝の敵を屠ることを誓う。汝に我が愛と忠誠を捧ぐ』

それは己が主へと忠誠を捧げる騎士の魔法契約。この魔法契約は一生続き、契約を違えれば待つのは死のみ。それ故、この契約は重い。こんな軽々しく行っていないものではない、はず。

「嘘、だろう？」

自分の手首を見れば、確かに契約の印が刻まれていた。同様に、彼の手首にも同じ印がついているだろう。

「本気。ということ、これからよろしく。俺はシェイス・スクオーツ。あんたは？」

シェイスを知る者ならば生き生きとした姿に誰もが驚くだろう。しかし彼の変化を、会ったばかりのルーティシアが知るはずもない。

この後、帝国は隣国への出兵が議会で承認され、正式に宣戦布告が成された。報復をするために総指揮にスオーツ公爵が抜擢される。幼い嫡子は、戦場の最前線へと自ら志願。傍らには忠実な若き騎士

があつた。若き騎士は、同胞と共に目覚ましい活躍を上げる。ドールの英雄の誕生だった。

「ええと、つまりシェイス殿は母上の泣き顔を得るために愛したと？」

「な。おかしいだろう？私は未だにこいつが何を考えているのかよく判らん」

「全部ルーシアさんのことしか考えてないよ、俺は。きっとあの時俺はあなたに一目惚れしたんだ。その愛が暴走して結果的にあなつたの」

上体を起こしたシェイス殿は飲み物を作りにいき、僕は母上に手招きされて母上の隣に座る。

「この話はルカと私だけの秘密だぞ」

二人だけの秘密。母上と秘密を共有できることが嬉しくて、僕は大きく頷いた。

歴史の教科書を捲っていた僕は当時を思い出して苦笑した。今に思えば、必要なことだったのだ。陸軍総司令が、国や皇帝以外に忠誠を捧げてるなんて許されないことだから。

「母上ほどの立場だからこそ余計、だろうな」

もしかすれば皇帝以上に権力を持っている母上。露見すれば謀反有りとして最悪内乱に発展するかもしれない。

母上の手首の秘密は二人だけのものだ。

出会いシエイス（後書き）

うーん、予想以上にまともな出会いに。もっと奇天烈な感じにしたかったんですけどね。兎に角シエイスの思考はぶっ飛んでいる、ということで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0389m/>

六人の旦那様

2010年12月9日11時19分発行